【34】

氏　名（本籍）	中根隆行（なかねたかゆき）（三　重　県）
学位の種類	博　　士（文　　学）
学位記番号	博　甲　第　2474　号
学位授与年月日	平成13年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	〈朝鮮〉をめぐる表象の文化史 —日本近代における知の植民地化と文学—

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	阿　部　軍　治
副　査	筑波大学教授	博士（文学）	荒　木　正　純
副　査	筑波大学教授		池　内　輝　雄
副　査	筑波大学教授		名　波　弘　彰
副　査	筑波大学助教授		宮　本　陽一郎

論文の内容の要旨

本論文は，日本近代の知的言説による朝鮮及び朝鮮人表象を考察し，その言説編成のプロセスを文学あるいは文化的交渉という観点から明らかにすることを目的としている。朝鮮表象は，怠惰・汚穢・停滞といった言葉に象徴される負的表象そのもののありようのみが問題なのではなく，むしろそのような表象を成り立たしめていた知的言説の趨勢や文学・文化の諸相が問題であったとする見地に立ち，それはまた日本近代の文学・文化を形作る根幹的要素であったとの立場から論究していて，論文は以下のような構成になっている。

序章

第Ⅰ部　明治期における文学と朝鮮表象の系譜学（第1章～第3章）

弟Ⅱ部　朝鮮表象と文化を語る枠組みをめぐる比較交渉（第4章～第6章）

第Ⅲ部　朝鮮人日本語作家をめぐる文化地図（第7章～第9章）

結章

序章は，本研究の目的と方法及び先行研究などについての総説である。先行及び関連研究の枠組みが，社会学に基礎をおく文化研究が近代知識人の言説を帝国主義との関わりから問い直し，朝鮮表象テクストが朝鮮の植民地支配に参与したかどうかという点から評せられる傾向にあるのに対して，本論では朝鮮表象という問題系を文化史的観点から文学研究の問題として問い直すという姿勢をとり，朝鮮表象テクストの言説内容のみならず，それらが生産された文化的プロセスに力点をおき，その文化史的叙述を試みるとしている。

第Ⅰ部は，明治期における朝鮮表象の問題系の諸相と日本文学についての関わりを日清・日露戦争期と日韓合併期に焦点をあてて検証し，特に日本の知的言説による文化を語る枠組み及び文学的制度との複層的関係性について論じている。第1章「旅するコロニアル・ディスコース」では，近代に西洋から移入された知が内面化され，のちの朝鮮表象が，まず明治初期に欧米諸国から移植された各国文化を枠取る言表の型に基づき編成されたこと，この言表の型は，欧米先進諸国を基準にして〈半開→文明〉へと成り上がる日本の自己表象を測る尺度であり，その〈文明開化＝交通〉のプログラムを支えるために編成されたのが朝鮮の負的像であったとの見方を示している。第2章「従軍文士の渡韓見聞録」では，日清・日露戦争期新聞雑誌メディアの戦争報道は朝鮮表象ブームを到来させたが，その朝鮮表象テクストを系譜的に考察し，鉄幹の「観戦詩人」等の分析をもとに，朝鮮表象の構図が

文学作品の物語構造に応用された経緯や，従軍記・ルポルタージュから戦争小説へのジャンル的移行等を明らかにしている。第3章「朝鮮を〈写/移〉すということ」では，植民地表象の典型的事例として虚子の『朝鮮』を取り上げ，植民地主義的イデオロギーとの間に揺らぐプロセスを明かにし，この小説が植民地文化を蒐集する観光主義的な物語であること，ここにあるのは植民地主義的イデオロギーではなく，写生主義というリアリズム的探求であり，その所産がこの小説の細部に描かれた朝鮮の異種混淆的な文化表象であることを論証している。

第Ⅱ部は日露戦争後から大正期にかけての朝鮮像の流通の様態を〈地方〉と〈植民地〉の間の文化地政学的観点から分析し，帝国主義あるいは植民地主義が決して一枚岩的な言説ではなく，様々な内地文化や文学を語る枠組みと通底することを明らかにしている。第4章「日露戦争後における朝鮮植民事業の文化地政学」では，日露戦争後の植民地主義を植民イデオロギーという観点から捉え直し，青年・学生層の満韓地域への海外雄飛に焦点をあて，それを巡る議論が帝国主義的な国民像を産出してゆく文化的プロセスを検証，植民事業が朝鮮を就職市場として開拓してゆく経緯や，朝鮮が帝国主義的青年像を養成するための社会教育の場として利用された経緯等を解明している。第5章「明治末の青年文化と〈地方〉をめぐる言説空間」では，海外植民政策と併行して生成された青年文化を〈地方〉へと囲い込む知的風土の力学を考察している。新聞雑誌メディアや青年文化を枠づけてゆく知的言説の趨勢は〈地方〉及び〈植民地〉へと向かうが，都会の青年風紀問題に対応して当時の新聞雑誌が，地方青年の東京遊学から始まる立身出世の階梯を抑制し，健全な青年を育成するために〈地方〉的価値を創出して行った経緯を解明している。第6章「大正期における地方農村と植民地の境界」では，負的像として流通されてきた朝鮮表象の言表の型が，明治末における地方農村の農民表象といかなる互換性を有するかを明らかにしている。そして朝鮮人農夫を描いた中西伊之助の『赭土に芽ぐむもの』を例に，この時代の農民と朝鮮人表象が互換可能な言表の型をもち，朝鮮というトポスは，内地〈地方〉の辺境という地政学的な特徴をもって差異化されていたとも説いている。

第Ⅲ部は，昭和初期からアジア・太平洋戦争後にかけての植民地文学と在日コリアン文学に焦点をあて，これまで語られる対象であった朝鮮の人々が，日本語作家として自己や日本を語る主体へと移行するプロセスを考察している。第7章「朝鮮人作家張赫宙の誕生と雑誌メディアの交渉」では，朝鮮の人々が日韓併合後に制度化された植民地教育により流暢な日本語を語り出すというプロセスを，1930年代に活躍した張赫宙の日本文壇登壇の経緯から検証している。彼の登壇には朝鮮人日本語作家であるということ自体が『改造』懸賞創作当選後の彼の商品的差異となるが，そこには文学界の新たな物語的風土開拓と『改造』の満州事変後のメディア戦略が介在していたこと等を解き明かしている。第8章「朝鮮人作家と日本文学界をめぐる交通の1930年代」では，植民地の作家が宗主国の文学環境に積極的に包摂されたこの時期，内地文芸ジャーナリズム等との交渉という観点から，植民地文学のジャンル的形成についての分析を深め，中西伊之助や張赫宙らによる植民地主義批判の言説内容が朝鮮総督府の文化政治のスローガンに吸収されかねない話型を有していた点を明らかにしている。第9章「在日コリアン文学の誕生」では，太平洋戦争後の在日コリアン文学に関する議論と金達寿の初期小説群に焦点をあて，民主主義文学をめぐる戦後日本の知的言説の進展と在日コリアンの文化的アイデンティティ構築のプロセスを解明している。

結章では，各章の考察から得られたのは，朝鮮表象の問題系がその負的像の産出とそれに対する批判という従来の植民地表象論をもって事足れりとするわけにはいかないということであり，日本近代の朝鮮表象という言説空間とは，〈朝鮮〉を巡る議論と国内の文学・文化の諸相とを相互交渉的に繋ぐ回路であり，日本の植民地主義が日本と朝鮮の間を厳として切り分ける一枚岩的なものではなかったということを内在的に証明するイデオロギー闘争の場であったというのが，本論文の結論であるとしている。

なお，付録では，第Ⅲ部で論じた1930年代の「植民地文学」のジャンル的生成期における主流文学の言説編成論とそのケース・スタディとしてナショナリズムと文学的営為について論じた佐藤一英論，また現代文学における韓国表象の批判的実践を究明した中上健次論を補論として収録することで，本論を補強している。

審査の結果の要旨

日清・日露戦争期に，文学をはじめとする知的言説によって形成された朝鮮および朝鮮人についての規格化された像，即ち，怠惰・汚穢・停滞といった偏見を帯びた文化・人種的表象が，歪曲されたものであったという事実は否定すべくもない。本テーマに関連した従来の研究に関して言えば，社会学に基礎を置く文化研究は近代知識人の言説が帝国主義との関わりを問い直すのに対して，その文学研究は代表的な作家・知識人の言説を検証することを主としている。それに対して本論文は，日本近代の朝鮮表象のプロセスを明治初期から戦前を中心にかつ戦後まで横断的に，文学を主に文化史的な観点から検証して文化史的に明らかにすること，即ち朝鮮表象の文化史を日本内地における文学・文化の諸相との複層的連携から把捉して解明することを試みようとするものであり，このようなアプローチの仕方に先ずは本論の新しさがあり，それが相当程度に成功していると見ることができよう。

朝鮮に関するこの偏見を帯びた負的文化・人種的表象は，わが国では日清・日露戦争期の知的言説によって規格化された像を礎にして以来，その言説内容の基本的枠取りはあまり変化してこなかった。朝鮮表象の文化史を，本論文は，わが国の知的言説によるオリエンタリズム的知の産出をめぐる問題系であると同時に，日本の言説風土自体をめぐる知的植民地化の問題系として設定し，朝鮮の文化・人種的表象は，欧米先進諸国による植民地表象の構図に依拠するものであり，明治期に移植された西洋的知を日本の知的言説が自己内面化することにより成立したと説得力をもって説いている。本論文の特徴と意義は論文の要旨にある通りであるが，日露戦争後における日本の植民地主義を朝鮮表象と植民事業という文化構造との関係から捕らえ直した試み（第４章）や，青年文化と地方文化及び文学との関係を解明した考察（第５章），朝鮮の差異化と表象が日本内部の地方の差異化と他者表象に類似性をもつとの指摘（第６章），朝鮮人作家張の誕生と雑誌メディアとの関わりの詳細な検証（第７章），朝鮮人日本語作家と植民地表象を巡る文学環境・内地メディア等との関連についての詳細な分析（第８章）等は特に評価できよう。また埋もれていた資料の掘り起しを含め極めて膨大な資料を綿密に考証し，かつ全般的に論述にも説得力があり，詳細な注も含め評価できる。

しかし全く問題や課題がないわけではない。本論文は朝鮮表象の文化史と銘打っているにしてはその取り上げている例が十分ではなく，取り上げたもの以外の時期や分野の事例ももっとほしいところではあった。植民地化された朝鮮では1930年代には張赫宙をはじめかなりの朝鮮人日本語作家が出現しているにも拘わらず，取り上げられている作家が少なく，不十分ではある。第９章戦後の在日コリアン文学に関しても，取り上げられている作家が少なく，この論文からだけではそれがどのような文学なのか，具体的なイメージを持ちにくい。また負的朝鮮表象のみを一面的に取り上げたやり方にも疑問の残るところである。そして本来なら，植民地下の朝鮮人自身の母国語による自画像・自己表象の事例もほしいところではあったが，これらは今後の課題として残っている。

以上のような問題や課題があるとはいえ，本論文は朝鮮表象に関する新しい研究の試みであり，全体としてのその水準も高いものがあるし，この分野での文化史的考察が少ないことを考慮するなら学界に寄与するところも少なくないと思われ，学位論文として十分に価値のあるものである。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。